

## 緑化木の輸出に向けた 線虫フリー苗の育成および品質保持技術

緑化木は、主な用途である公共施設や住宅での緑化需要の減少により、国内全体の需要が減少しています。このような中、主産地である福岡県久留米市ではEU現地調査を実施し、ツバキやイヌツゲは需要が見込める新たな輸出品目であることを明らかにしました。そこで、福岡県農林業総合試験場では、EU向けの緑化木の輸出力強化を図るため、植物検疫での線虫対策技術、出荷期間の拡大のための輸送中の品質保持技術を開発しましたので、その概要を紹介いたします。

### ☆ 技術の概要

1. 緑化木（ツバキ、イヌツゲ）の「線虫フリー苗」を育成し、出荷前に検疫（線虫）対策を行い、リーファーコンテナ（冷蔵可能な輸送コンテナ）を用いて低温、暗黒条件下の船便で輸送することで、EUへの輸出が可能となります（図1）。
2. 「線虫フリー苗」の育成方法は、挿し木および鉢上げをする際に培土の代替として線虫汚染防止対策の施されているピートモス（クラスマン社製）を用います。これにより、苗の挿し木発根率、樹高、新梢伸長は慣行の培土と同等で、生育後の有害線虫も検出されません。
3. 出荷前の検疫（線虫）対策は、農薬による線虫防除の後に、パラフィンを含む特殊肥料（プロテックα50倍）を葉面散布し、鉢部分を0.03mm厚のポリエチレン袋で被覆します。これにより、葉、土壤からの水分蒸散が抑えられ輸送中の苗重減少を抑制できます。
4. 緑化木の輸出は12～2月を中心に行われていますが、9月および11月に出荷しても1月出荷と同様、輸送後の落葉や葉の変色はほとんど認められず、輸出期間や販路の拡大による生産者所得の向上が期待されます。

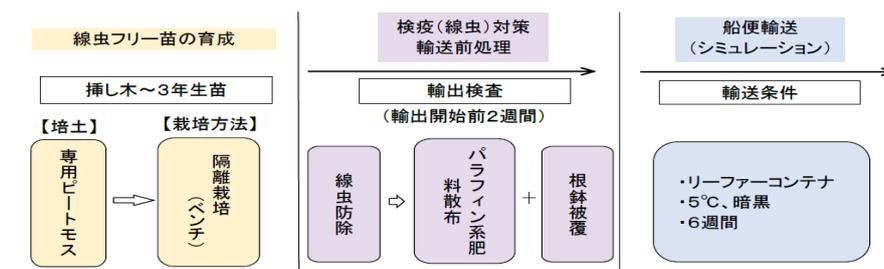


図1 開発技術による緑化木（ツバキ、イヌツゲ）苗の輸出工程

### ☆ 活用面での留意点

1. ツバキの9月出荷では、輸送中に新梢伸長をしますが、枝の充実が不良なため、輸出先が厳寒期の場合、枯死することがあります。
2. 育成中の苗鉢は、土壌と直接、接しないようベンチ等を用いた隔離栽培とします。
3. 詳しいことは、福岡県農林業総合試験場資源活用研究センター苗木・花き部（TEL:0943-72-2243）までお問い合わせください。

（日本政策金融公庫農林水産事業本部 テクニカルアドバイザー 吉岡 宏）